

2023年9月10日（日）主日朝礼拝説教

『教会、キリストの像』 井上隆晶牧師
ローマ15章1～7節、ヨハネ13章33～35節

①【弱い人を担いなさい】

「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。」(1節)

パウロがこのようなことを書くのは、教会の中で金持ちだけのグループや仲良しグループだけが集まり、孤独な人や奴隷や貧しい人たちが隅っこに放っておかれたからでしょう。実際、コリント教会では、聖餐式の時に各自が勝手に食べてしまい、空腹の者がいたといっています。(Iコリント11:21) これはローマ教会でも同じだったということです。

よく教会生活は、次々といろんなことをしなければならず、いろんな人と関わらなければならず、煩わしいと不満を言う人がいます。でもその煩わしさが教会の良さなのだと思います。人と関わるという事は楽しいこともあります、しんどいこともあります。楽しい人と関わることは誰でも楽しいですが、苦しんでいる人と関わることはしんどいことです。それはキリストの十字架にあずかる事であって、もしその煩わしいことが嫌なら、キリストの愛は決して分からないと思います。『羽根布団にくるまって天国に行った聖者はいない』ということわざがありますが、楽しい思いをしながらキリストに似た者にはなれないのです。

●先日、ある委員会でそれぞれの近況報告をしていた時に、ある先生が長い間、自分が信じてきた信徒さんに裏切られたという話をされました。でもその話が30分も続き、話が前後して文脈がつかみづらく、声も小さかったので、半分しか聞こえなかったこともあり、ウトウトと居眠りをしてしまいました。いつになったら話が終わるのだろうと思ったら、やっと委員長が止めて下さり、ホッとしました。私は話が長いことでイライラしたのですが、同僚の年配の先生はその方に「先生も、信じていた人に裏切られたら辛いよね」と言われました。その年配の先生だって話が長いことでイライラしていたはずなのに、その口から出る言葉は温かく優しいのです。それを聞いて、ああ私もそのような返事ができるような心の広い人になれたらいいのになあ、と反省をしました。その年配の先生の家は精神病院で、お父さんは精神科のお医者さんでした。彼は子どもの頃から病院の患者さんと遊んだり、話をするのが慣れていて、その人たちの悲しさをいろいろと見て来たからだと思います。

私たちの身体の事を考えても、風邪を引くと、身体の中で一番弱い所に熱が溜まります。でも、身体は全体でそれをカバーし、強い部分はその痛みを分け合い、

熱を分け合うことを通して癒そうとします。教会生活というのはそれと同じであって、苦しんでいる人の苦しみを分け合うことによってその人は癒されてゆくのです。

②【キリストは自分の満足は求めなかった】

「おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。『あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった』と書いてあるとおりです。」(2～3節)

ここでは「自分の事ではなく相手のことを考えなさい」ということが言われているのです。キリストは自分の満足を求められませんでした。いつも罪人である人間のことを考えられました。神であるのに人になり、罪がないのに罪人とされ、聖なる者であるのに、汚れた者たちと共に食事をし、何でも知っているのに、無知な者に合わせて例え話しか話されず、主人であるのに僕となって弟子の足を洗い、最も高きにおられる方であるのに、最も低くなり小さくなりました。イエス様は自分の事を考えませんでした。それは彼が愛だからです。「愛は自分の利益を求めない」(I コリント 13 : 5) と書かれているように、相手の事を考えます。彼の関心は、私たちが幸せになる事でした。自信がなかった人が自信を持つようになり、悲しんでいる人が喜べるようになり、孤独な人に友人が出来、絶望の中にいた人が希望をもって立ち上がり、前に向かって歩むようになり、自分が嫌いだった人が自分を愛せるようになることでした。彼は自分の事を顧みないで私たちが愛して下さいました。だからこそ私たちは救われ、豊かにされたのです。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。」(I コリント 8 : 9) というみ言葉があります。神は私たちにご自分の豊かさを与えたかったのです。その為にあの方は貧しくなられ、私たちの側に来てくださったのです。感謝です。

③【あなたがたも互いに受け入れなさい】

「だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。」(7節)

第二次世界大戦の時ドイツに D.ボンヘッフアーという牧師がいました。ヒトラーの暗殺計画に加担したとして逮捕され処刑されましたが、彼は姪の結婚式のために獄中から手紙を書き、この 7 節の言葉を引用して、結婚生活というのは互いに相手を受け入れるものであるということを書いています。誰でも受け入れやすい人を受け入れることは出来ます。しかし受け入れたら自分が潰れてしまう、または自分が傷つけられてしまうような人を受け入れて行くことはなかなか出来るものではありません。私も出来ません。今でも傷つくのが怖いのです。だからどうしても距離を取ってしまいます。どうしたら出来るのでしょうか。

●京都アニメーション放火事件の青葉被告が都島拘置所に拘留されています。判

決までに 140 回以上の公判がなされるのでほぼ毎日、都島から京都まで移送されます。青葉被告は小学 3 年生のころ両親が離婚し、父親と兄、妹の 4 人で暮らすようになりますが、父親から毎日暴力を受けていました。完全に機能不全家庭でした。その後父親も妹も自死しています。電気もガスも水道も止められ、生活保護を申請しても受け入れられず、悲惨な生活だったようです。この社会が青葉被告を作り出したと言えるかもしれません。もし私たちが彼と同じ家庭環境だったら、愛し受け入れてくれる人が誰もいなかったら私たちもどうなっていたか分かりません。たまたま、私たちには愛してくれる家族や人がいたという事です。

キリストによって、また多くの人によって自分のような者が受け入れられ、赦されているということがどんなに大きな恵みであるかということを知らなければいけません。自分のような者でも赦され、愛されるなら、同じような罪人も赦し、受け入れられるという気持ちになれるのです。

真珠貝は自分の中に異物を入れられます。その痛さ、苦しきから出た涙が異物を丸くし、光を放つ真珠に変えるのです。この異物とは私たちです。私という異物を受け入れたキリストは痛み、苦しみ、血を流し、涙を流されました。しかしそのキリストの涙によってあなたは丸くなり、光を放つようになったのです。多くの人の愛と犠牲が今の私たちを造ったのですから、私たちも出来る限り出会った人たちを愛し、受け入れ、時に犠牲を払いましょう。それこそ教会、キリストの姿を世に現わすことなのです。